



楽しさが湧き上がる「保育の土壌」を作りたい  
～あるがままの生活に、豊かな体験を～

京都市楽只保育所

# 目 次

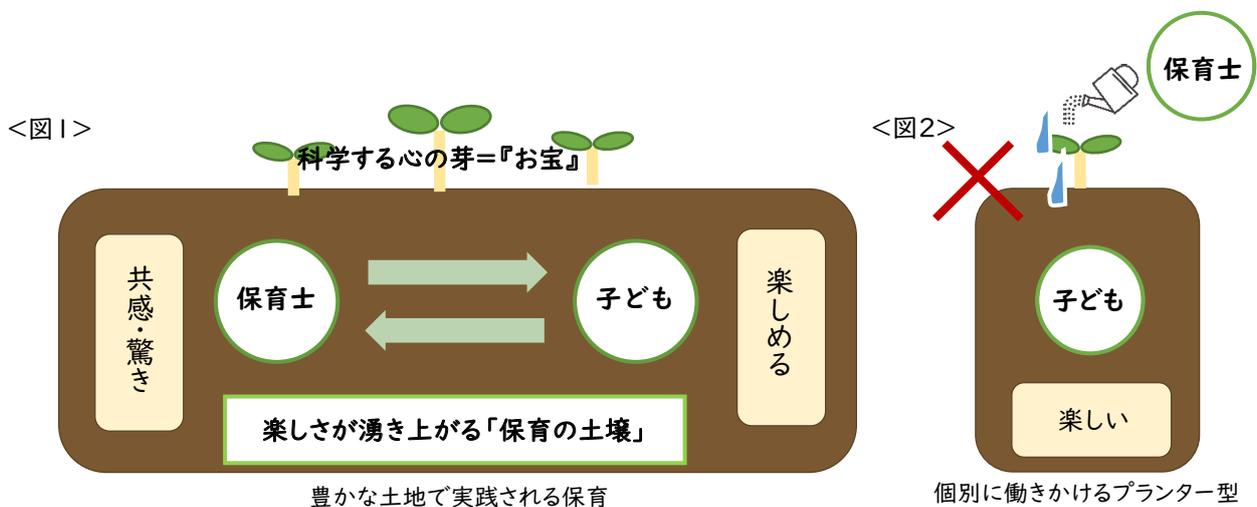
□科学する心が育つ土壌とは	1
□実践事例	2
(1) “バチャーン”と“ぴちゃぴちゃ”(2歳児)	2
◆発見が溢れている豊かな環境を目指して①〈自然農法の菜園〉	4
(2) あ、いた！(1歳児)	4
◆発見が溢れている豊かな環境を目指して②〈竹のトンネル〉	5
(3) “ガジガジ”と“ふわふわ”(2歳児)	6
(4) スイカ取ったよ！え？もう！！(2歳児)	7
◆発見が溢れている豊かな環境を目指して③〈木製の舞台〉	9
(5) ウォータースライダー(2歳児)	10
(6) 今日こそパンツを持ってきた！(大人)	11
(7) よっしゃ、やってみなはれ！(大人)	13
(8) 泡遊び、楽しそう！私もやってみたいけど…(3歳児)	14
□保護者への架け橋	16
□全体考察	17



## ◎科学する心が育つ土壌とは

子どもたちが「科学する心」を培っていくためには、小さいときにしっかりとその芽を耕すことが何より大切である。それは何も特別な準備物が必要な訳ではなく、ごくありふれた日常の豊かさから生まれてくるものであると考えている。

今回は乳児保育に焦点を当て、保育実践を8例挙げた（うち幼児1，大人2）。それを基に幼児を含む全職員を対象に「保育を語ろう会」を行い，“科学する心が育つ土壌”について語り合った。保育実践で生まれてくる働きかけの一つひとつに、何か共通した要素があるのではないかと考えたからだ。痩せた土地からは作物は育ちにくいですが、豊かな土地からはふつふつと作物の芽が出てくる。保育をしているうちに、科学する心があちらでも、こちらでも芽が出てきた。そんなイメージである（図1）。個別的に保育士が、良かれと水や栄養（知識）を与えるプランター型の保育ではない（図2）。



楽只保育所は、重点目標の一つとして「子どもも大人も楽しめる保育を展開する（一緒に楽しく遊ぶ）」「子どもと保育士との接面<sup>※1</sup>を大切に、子どもと保育士との間に生まれる心の動きをしっかりと捉え保育する」を掲げている。目に見えない心の繋がりである接面を大切にしてきたことで、子どもの気づきや発信をきちんと大人がキャッチし、科学する心を育てることに結びつく。

子どもの生活や遊びには『お宝』がいっぱい溢れている。『お宝』とは、子どもが主体的に活動する中に潜んでいるものであり、これが科学する心の芽となる。例えば、乳児期の子どもや障害があり、うまく言葉で表現できない子どもたちが、光・風の流れ・空気の動きなど自然の不思議さや美しさを「肌で感じる」「聴く」「嗅ぐ」「見つめる」「触れる」などを感じる姿がある。その目に見えない力（非認知能力）に大人が感動し、子どもと目と目を合わせて共感し、心と心がつながることが、科学する心の芽を育てる基礎となる。また、信頼する大人が心から楽しんで面白がって遊んでいる姿や、楽しそうな雰囲気、「初めてのことは怖いけど、触ってみようかな」と子どもが自ら様々なものに手を伸ばしていく姿こそ、主体的な科学する心の第一歩であると考えている。このような大人との

※1…接面とは、保育士と子どもとの間に生まれる心の動き。

<参考文献> 鯨岡峻「関係の中で人は生きる：「接面」の人間学に向けて」ミネルヴァ書房

関わりの中で、初めての驚きや感動を共感し合うことができ、豊かな感性が芽生えていくと考えている。そして保育所に四季が感じられ、発見が溢れている豊かな環境があること。子どもが発見し不思議さを身体全体で感じ、「こうしたい」「試したい」という子どもの好奇心や探求心が尊重され、思いつき試せる環境が科学する心を育てることになると考える。まさに『保育は科学』である。

今回の研究テーマ『科学する心が芽生える土壌づくり』として、主体的に遊ぶ子どもの姿の読み取りを保育実践から行い、乳児期における保育士の存在と役割について検証していきたい。仮説として、以下のことをポイントに検証していくこととする。

- ① 発見が溢れている豊かな環境。
- ② 共感してくれる仲間がいる。
- ③ 子どもの気づき(科学する心の芽)をキャッチし、共感し、感動する感受性豊かな保育士の存在。
- ④ 子どもも大人も心から楽しめる保育実践があること。
- ⑤ 楽しさのおすそわけの大切さ(思わず事務所や休憩室で話したくなる)。

## ◎実践事例

### (1) “バチャーン”と“ぴちゃぴちゃ”(2歳児)

7月上旬のうだるような暑さの夏の日。園庭でウォーターライダーをしている子どもたちの笑い声。その横ではスライダーで使っている流しっぱなしの水が、大きな水たまりを作り、別の遊びが始まろうとしていた。水たまりを歩く子。泥水を容器に入れる子。泥水の中に寝そべる子まで。寝そべっているAちゃんが「気持ちいい?」とUちゃんに聞くと、Uちゃんは「あったかいなあ」と見合っこ。Kちゃんもそんな様子に誘われて、一緒に寝そべっていた。泥まみれになりながらも、身体全体で感じている3人の姿を、保育士は温かく見守っていた。

すると突然大きな音。Aちゃんが「バチャーンっていった!」とビックリした様子。「ほんまやなあ」とUちゃんとKちゃん。「うわあ、びっくりしたなあ」と保育士。丸太の飛び石からジャンプしたSくんの水しぶきの音が聞こえたのだ。大きな音ももちろん、水しぶきが立つ様子が面白くなって、周りの子どももやりたくなったのか、次々に飛び込んでいった。

2日後。その日もあまりに暑いので、保育士が菜園の支柱に水道ホースを結び付け、雨のように水を出した。一昨日の泥水の子どもたちの気づきの様子を見て、何か経験が広がるのではないかと感じたからである。



両手を横に大きく広げて「うわあ、きもちいい」とNくん。少し涼しくなり心地よい空間が生まれたことに、子どもたちもはしゃぎ出した。

しばらくすると、菜園と丸太の一本橋の間に水がたまり始めて、おもむろに走るKくん。不思議そうな顔をして、同じ道を帰るようにまた走り、“走って戻る”を繰り返していた。そんなKくんの様子を見て不思議に思った保育士は「なにしてるの？」と聞くと、「ぴちゃぴちゃ、いうねん」とKくん。「ぴちゃぴちゃ？え、あ、そうなんや。走ると、ぴちゃぴちゃ音が出るんやなあ」と足音がいつもと違う音がすることに気づいたのだと分かった。Kくんの姿を見たほかの子たちも、楽しそうな様子を見て一緒に走り出した。「ぴちゃぴちゃ」することが分かって楽しんでいる子もいれば、何で走っているのか分からずに、とりあえず楽しそうだし走っている子もいたように思う。



#### <考察>

水にまつわるエピソードである。メインの活動としてはウォーターライダーをしていたが、どこで遊んでも良い訳である。しかしウォーターライダーをしていたが故に、普段にはない大きな水たまりが出来ていた。最初は普段の泥水遊びをしていた子どもたちが、次第に大胆になっていく。いつもとは違うあまりに多い水の量だから、全身で感じてみたくなったのだ。寝そべって、なんとも言えない泥の生ぬるさを肌で感じ、友だちと共有していた。「気持ちいい?」「あっかたいなあ」の会話からは、全身で感じた心地よい感覚を共有している姿があった。こんな経験の積み重ねが、豊かな感性を育てていくのだと思う。



また、音に対しての気づきが見られた。寝そべっていた時の突然聞こえた「バチャーン」の音！耳と水とのあまりの近さに、水を伝って聞こえた音は、Aちゃんは、たいそう驚いたことだと思う。水の音を発見しただけではなく、“飛び込んで音を出す”という行為で、音そのものを遊びに繋げて繰り返し飛んでいた。その経験があったからこそ、2日後の別場面で「ぴちゃぴちゃ」の音に気付いたのだと思う。飛び込んだ時とはまた違う、自分の動きについてくる音。「ぴちゃぴちゃぴちゃ・・・」と走りながら、音を連れてくる感覚があったのでないだろうか。子どもたちにとっては何気ない遊びなのかもしれないが、しっかりと「科学」を感じていると感心した。

乳児期に「遊びを通して、違いを全身で感じて気づくこと」が、これから先に「科学する心」を培っていくための土台となっていくのだ。

## ○発見が溢れている豊かな環境を目指して①

### <自然農法の菜園>

昨年度の園庭の課題として、以下のことが挙がっていた。

- ・草花が少なく菜園も思うようにいかないため、季節感が感じにくい。
- ・乳児にとっては自然豊かな場所に行くのは遠い。自然を感じたい。

課題に対処するために、菜園に注目して実践することになった。いわゆる「慣行農法」で栽培をするのではなく、菜園を野菜や草花やそこに来る虫が競合できる場所に変えていくために「自然農法」の手法を用い、子どもたちが気軽に関われる環境を目指した<sup>※2</sup>。

また園庭に生えている草花は、パンジーなど景観が目的のものが多く、観察することが中心となっていた。では保育所に花は一体何のためになるのか。子どもたちが見ているだけでは勿体ないと考えた。そこで昔からあるレンゲやクローバーなどの

「緑肥」に着目して、「採ってはいけない場所」を極力減らし、いつでもどれだけでも採っても良い場所を増やすことで、子どもたちの遊びを豊かにすることを目指した。昨年11月には菜園前を白クローバー畑として職員と子どもと一緒に作業を行った。市販の土にクローバーの種を混ぜて、子どもたちとペンキのように地面に塗っていく簡単な作業に、保育士からも「これで本当に育つのですか？」という疑問も上がったが、2月にはすっかりと地面をクローバーが覆い、緑の絨毯となった。子どもたちは素足で踏んだり、葉っぱをバケツに1つ1つ摘んでは集めたりして、ままごとなどして遊ぶ姿が見られるようになった。また、菜園で抜いた雑草を集めて置いた「虫の畑」を作った。草の塊の下にはダンゴムシやミミズなどの虫が次第にたくさん増えてきた。

自然農法の菜園があることで、子どもたちが動植物に親しみ、命と触れる機会が増えただけではなく、豊かな環境があることによって保育士の「禁止」や「制止」の言葉掛けが圧倒的に減ることによって、子どもたちの遊びの幅が広がる効果を感じている。

※2…昨年度の保育実践は、下記の実践論文（京都市保育園連盟主催「京都市保育文化賞」受賞）を参照。

「自然農法を通して感じる、園庭づくり～保育士が実践できる自然農法と野菜、草花、虫に関わる子どもたち～」関谷翔（楽只保育所）、2019



### (2) あ、いた！（1歳児）

5月上旬。保育所生活にも少し慣れてきた頃、園庭に出るために、Sくんはテラスで靴を履いていた。Sくんは靴を履くなり、さっと立って、菜園へ。一人で駆けていく姿に慌てることなく、保育士もついていく。Sくんは、慣れた手つきで枯れ草をよけると「あ、いた！」と笑顔を見せた。担任は「ほんまやなあ、ダンゴムシ、いたねえ。」とSくんに笑顔で返す。春に枯れ草の下にダンゴムシがいることを知ったSくんは、それからは、毎朝1番のお決まりのコースになっている。それはSくんにとって大事な行為だと感じ、保育士も毎日笑顔で返している。

いつも隣で見ている A ちゃんは、「こわーい」と言いながらも興味があるので、少し離れたところから一緒に見ているが、まだ触るのは抵抗がある様子。A ちゃんの視線の先には、S くんの手にあるダンゴムシ。ちょっと前までは強く握りしめてしまい、潰してしまったこともあるが、S くんは今では優しく扱っている。「こっちは、あかちゃんダンゴムシやなあ」「こっちはおかあちゃん」と S くんとの眼差しは生き生きしている。担任は S くんの様子をこれからも寄り添いつつ、A ちゃんの心が動き「さわってみたいな」という日が来るまで、しばらく待ってみようと思っている。



#### <考察>

毎日の恒例行事になっている S くんの手探しのダンゴムシ探し。保育士が自然菜園を作ってから枯れ草の下には、S くんの手探しの期待を裏切らないほどの虫が集まっている。

実践からは S くんの手、「やっぱりいた！」という安心感と、側にいる担任にその気持ちを受け止めてもらえる嬉しさが伝わってきた。毎日同じ場所で探している S くんの手探しの姿をキャッチしている担任だからこそ、毎日同じように関わられる。S くんは発見だけでなく、嬉しい気持ちを受け止めてもらえることで、自分のやっていることはそれでいいのだという自己肯定感を育てていく。



また、S くんは S くんなりに「この葉っぱの下にはいるかもしれない」と予測したり、ダンゴムシの大きさを比較したりしている。これは今後、(1)の保育事例のようにやがて“違いに気づく力”となっていくと考える。ダンゴムシを潰さない力加減も身に付けてきた。さらに S くんが感じているのは、まだ他にあるかもしれない。何故ここまでこの行為に惹かれ、毎日毎日継続しているのか。今後も様子を見守りたいと思う。S くんの手探しの「のめり込める力」を大切に育てていきたい。

一方、まだ触れない A ちゃん。「怖い」という A ちゃんの手探しの気持ちにも寄り添いながら、一緒に場を共有している。S くんや保育士の手探しの様子を見ながら、少しずつ慣れていく A ちゃん。そんな時間も大切にしたい。

### ○発見が溢れている豊かな環境を目指して②

#### <竹のトンネル>

乳児園庭では、子どもたちの動線が三輪車やピーターカーなど動きのある遊びと、砂遊びなど静かな遊びの空間が交錯して、落ち着いて遊び込めないことが以前から課題であった。4月下旬、2歳児の担任から「隠れるような場所が少ないので、大きなトンネルが欲しい」という要望が出た。どんなトンネルにしたら楽しめるのだろうか。動と静の動きの整理がつく配置だけではなく、大きさ、素材、くぐるだけではない変化のある機能も持たせたら面白いのではないかと。限りある予算の

なか、自宅近くに生えている竹に注目した。子どもの動線を観察し、悩んでいると、「まずは作ってみて、あかんかったら修正したら良いやん」と同僚の声かけに気持ちも軽くなった。ブルーシートや遮光ネットを被せてトンネルにして遊ぶと、喜んで中に入る子どもたち。しかし数日後、1歳児の担任が申し訳なさそうに「丁度、目の高さに飛び出ている竹が危なくて。。。と訴えてきた。

「子どもの一番側で遊んでいる担任の先生が、気付いてくれるから有難い」と伝え、すぐに補修。言いにくいことを言える関係はとても大事だと感じた。また、もう少し変化が欲しいと感じた。今年度の栽培計画に「スイカ」と「カボチャ」があったので、このトンネルで育てると子どもたちは身近に感じるのでは。同じつる性のキュウリやヒョウタンも育ててみたら、どうなるだろうか。近年の天候不順もあるため、計画は余裕をもって2割増し。年間の予定にはない作物ではあるが、何かに生かせるかもしれないという気持ちで栽培を始めた。6月初めには、様々なつるが竹を伝い、緑のトンネルとなった。



### (3) “ガジガジ”と“ふわふわ”(2歳児)

念願だったトンネルができ、5月初旬にツル性の植物を植えたことで、子どもたちと一緒に成長を楽しみに水をあげていた。ツルがどんどん伸びていき、素敵なトンネルが出来上がった。小さいカボチャやキュウリ、ひょうたんの実が出来ると、ピーターカーや三輪車を走らせながら、上に出来た実を見上げていた子どもたち。日陰を求めて、緑のトンネルに入り、ツルの間から見える実を見て、「なんやろな？」と友だち同士で言い合っていた。「これなんなん？」と子どもたちが聞くので「これはカボチャ、これはキュウリ、これはひょうたんやで！」と実を指しながら答えると「ふ〜ん」と言って実を眺めていた。

6月初旬のある日、いつものように園庭に出て、「カボチャ、大きくなったかな。」と数人の子どもたちとトンネルのところまで見に行った。保育士が「カボチャ、大きくなったね。」と言うと、Sくんが「はっばも、おおきくなったなあ。」と言うので見てみると、本当に子どもの顔より大きくなっていて。私はカボチャの葉が大きいのは知っていたので特に気にならなかったが、Sくんは初めてカボチャの葉を意識してみたので、大きさに驚いたようだった。

Sくんは「おおきいなあ。」と言いながら、カボチャの葉を触っていた。触ってから「ガジガジやな。」と言うので、保育士も触ってみると、本当にガジガジでちょっと手が痛いぐらいだった。

その横にあるきゅうりの葉っぱも触って、「これもガジガジやな。」とSくん。葉の感触に意識が向いたSくんの姿に、ひょうたんの葉は見た目には柔らかそうだったので「こっちのひょうたんはどうか？」と保育士が言うと、Sくんは“確かめないよ”という表情で触った。

「こっちはふわふわやん！」とSくん。保育士も触ってみた。Sくんが言う通り、気持ちがい

いくらいにふわふわの柔らかさであった。Sくんの気づきに嬉しくなって、保育士はその場にいた所長に「聞いてください。Sくんがカボチャときゅうりの葉っぱの裏側を触って“ガジガジ”って言って、次にひょうたんの葉っぱを触って“こっちはふわふわ”って言うんです。すごくないですか？」と伝えた。すると所長もすぐに葉の裏を触って、「ほんとや、Sくんの言う通りやねえ」と嬉しそうにSくんに話し、周りの子どもや先生たちに「Sくんがな・・・」とSくんの気づきを話していた。

#### <考察>

6月初旬にあった竹のトンネルでのエピソードである。トンネルという普段の遊びの場所に、栽培活動を持ってきた。畑ではなく、遊びの中であえて栽培したことで、子どもとの物理的な距離だけではなく、心理的な距離も近くなった。そして昨年度の実践から、日頃から思う存分草花を触って摘んできた子どもたちである。そんな要因が重なって、子どもたちは違いに感じる事が出来たのではないだろうか。科学する心の芽を育てるのに、“「環境」と「子ども」の距離感”は非常に大切な要素ではないかと感じた。

また子どもの発見に気づき、実際に触って子どもが表現した言葉通りの感触に感動する保育士。「チクチク」でもない、「ザラザラ」でもない、「ガジガジ」。大人がカボチャの葉を触った時に、こんな言葉で表現するだろうか。まず、周りを納得させる表現力に感嘆した。

今まで育てたことのある野菜であるが、葉の感触を意識したことがなく、私たち大人は「見て、黄色い花が咲いているね」「小さな実ができたね」などと言葉掛けをして、野菜の成長の変化などを伝えようとしていたことに気がついた。勿論、変化に気が付いて欲しくて、保育士から伝えていくことも大事であるが、子どもたちが感じることや見たままの感動をしっかりと受け止めることの大切さを改めて感じた。この出来事をきっかけにして、ほしぞう組の子どもたちに「葉っぱを触ってみる」という行動が広がり、色んな感触を確かめる姿があり、隣のはなぞう組の子どもたちにも広がった。例えば、「葉っぱの裏側の感触」を事前に保育士が知っていて、あえて栽培し教えていたら、こんなに広がらなかったのではないだろうか。



#### (4) ほしぞうだより「スイカとったよ！え？もう！！」(2歳児)

「科学する心の芽」を保護者に伝えたいため、クラスだよりや保育所だよりにより保育実践と子どもの育ちを掲載するなど工夫をしてきました。保護者発信の事例を紹介したいので、この事例はクラスだより(7月ほしぞう組)から抜粋しました。

春に植えたスイカの苗がぐんぐん大きくなって小さなスイカができました。子どもたちと毎日「おおきくなったかな」と楽しみに観ることが日課になっていました。人工授粉をした結果4個の小さなスイカができました。大きくなったらみんなですいカ割りをしよかな、おやつにフルーツポンチとして食べよかな、スイカの絵も描こうと保育士はスイカを観ながら考えていました。

6月中旬のある日、Hちゃんが早めの収穫をしてしまいま



した。実がなっていたらもちろん取りたい気持ちはわかるので「これは小さいからみんなで食べられないし、次は大きくなってから取ろうね。」と話しました。(スイカ残り3個)

しばらく雨の日が続いていました。そして雨があがった6月下旬、Rくんがピーターカーに乗ってスイカがなっているトンネルを通るとコツンとスイカに頭が当たり、なんと！スイカが落ちてしまいました……。まだ取ってはいけないことを知っているのととても申し訳なさそうなRくんでした。取れた小さいスイカを部屋のお盆に2個並べました。(スイカ残り2個)

その15分後のことです。Tくんが……。収穫してしまいました。保育士がTくんはまだ小さいから取らないで欲しいということを話している後ろでHちゃんが聞いていました。保育士は1個目を取ったのがHちゃんだということを忘れていて、Hちゃんに「小さいのはまだ取ったらあかんのやな。」と声をかけてしまいました。ハッとしたHちゃんは下を向いてもじもじしてしまいました。Hちゃんは1個目のスイカを取ってしまい、また、自分と同じことをしてしまったTくんが保育士と話をしているので心配で様子を見に来ていたのだと思います。とてもやさしいHちゃんです。また部屋のスイカが並びました。(スイカ残り1個)

あと1つのスイカは少し高い位置にあったのもう早めの収穫はないだろうと思っていた矢先。はなぞう組のKくんが収穫してしまいました。なんと、この日の夕方時間だけで全部なくなってしまいました。その時保育士全員「あ～」と肩を落としました。Kくんは申し訳なさそうな顔をしています。もちろんKくんは、早めの収穫をしてしまった友だちが保育士に取らないでと言われていることを知っています。「取りたい、取ったらダメ…」が心の中で繰り返されていたのでしょう。でも最後に取りたい気持ちが勝って取ってしまったと想像して思わず笑ってしまいそうでした。(スイカ残り0個)

ほしぞうの部屋に並んだスイカを見てSくんが「これがRくんのとったすいか、これがTくんのとったスイカ」と眺めていました。

今現在、スイカもめげずに新たに3個できています。さあ、無事に保育士が思い描いたスイカ割りが出来るのでしょうか。乞うご期待。



(続きのエピソードは、8月クラスだよりに掲載されました。)

## <考察>

「大きくなってきたスイカの実を取ってみたい！」という子どもの気持ち。「大きくなってスイカで色々楽しみたい！」という保育士の気持ち。子どもが届かない場所でスイカを育てるのは、簡単なことであるが、担任は悩んだあげく、最後まで子どもたちが自由に触れられる状態で、スイカを栽培した。なぜなら栽培活動は、観察して収穫して味わうという目的だけではないはずで、子どもの心も一緒に育てていきたいという願いがあるからだ。



白いスイカを食べてみた

大きくなってきたら、取りたくなるのは、子どもらしい姿である。取ってしまうかもしれないことを想定内として、あえてこの方法で栽培した。どちらも真剣そのもので、最後のスイカが無くなった時の、保育士の落胆した様子も目に浮かんでくるが、決して子どもを責めずにKくんの気持ちも受け止めている。子どもたちに正しさばかり求めるのではなく、むしろ「やってしまった」経験から何かを学んで欲しい。

残念ながらスイカをとってしまった時には、保育室で小さなスイカを半分に割り、中身が白いことを観察した。匂いはまさにスイカ。子どもたちと一緒に一口ずつ食べてみると、ほんのり甘かった。後日、大きくなった赤い実のスイカを食べてみた子どもたちは「白いのより美味しいなあ」とつぶやく姿があった。「白い」のより「赤い」ほうが美味しい。味覚と共に記憶された経験からは、何故早くとってしまったら勿体ないのかを、身をもって実感したことだと思う。

「やってしまった」時に失敗のまま終わらせない、何かの経験に生かしてみるという“解決の仕方”も、こんな経験を積み重ねて、学んでいって欲しい。そしてなにより子どもたちには、失敗を恐れずにありのままの自分を心置きなく出せるようにと願っている。

保護者にとって、我が子の成長はどう映っているのだろうか。つい2年前までハイハイしていた子どもが、話したり、考えたりと色々なことが出来るようになっていく。嬉しさもありながら、我が子の将来を案じるが故に、どうしても他児と比較したり、分かりやすい力に注目しすぎてしまう。どの子どもも、土壌の中にしっかりと根を張る“かけがえのない乳児期を”充実して過ごすため、子どもの見えにくい力(科学する心の芽)をしっかりと育てたい。一見分かりにくい力の育ちをどう保護者に伝えていけば良いのか。試行錯誤をしながらではあるが、今回は子どもの揺れ動く気持ちと、保育のねらいをクラスだよりを使って発信をした。クラスだよりの反応が多く、保護者と語り合うきっかけとなった。保護者も一緒にスイカのゆく末を見守ってくれている姿があった。

## ○発見が溢れている豊かな環境を目指して③

### <木製の舞台>

幼児棟でも、昨年度より園庭改造に取り組んでいる。今年度は砂場遊びのコテや木製のL字のパーツなどの遊びが広がる道具作りや、木製の舞台を作る計画がある。舞台は大掛かりなので、乳児も協力して制作した。出来上がると、幼児



園庭では子どもたちが遊びの起点として舞台を用いて、お家ごっこをしたり、板を立てかけて遊んだりする姿が見られた。年長児の A くんは「俺、机の上に登って遊んで怒られへんの、初めてや」と言いながら飛び跳ねていた。

7月、乳児でウォータースライダーをしたいという話が持ち上がった。新型コロナの影響で、夏なのに各家庭で海やプールに遊びに行くことも難しい。それならばいっそのこと保育所でひと夏の思い出を作ろうではないかという魂胆である。即席のウォータースライダーが完成した。子どもも大人も楽しんでいた。



舞台を裏返せばバスごっこ

### (5) ウォータースライダー (2歳児)

暑い夏、水遊びを楽しむ子どもたち。体幹のしっかり育ってきている子どもたちの様子からもっと大胆な遊びも楽しめるのではないかと感じた保育士から「築山でウォータースライダーしてみませんか？」という声があった。もっと滑る方法はないかと2歳の担任の先生と考え、幼児棟から台を借りてきて簡易ウォータースライダーの出来上がり！作っているときから子どもたちは「なに、なに？」と興味津々に見ていました。

保育士が作った木製の舞台にブルーシートを重ねて、準備OK！子どもたちはタイヤを登って滑ります。坂になった滑り台に水が流れます。水とともにシューっと滑り降りる子どもたち。「きゃ〜つめたい。」と嬉しそう。それを見ている保育士もやってみたくなり滑ってみました。みんなで滑って楽しい一日を過ごしました。

2回目のウォータースライダーの時、あまり水遊びが好きでない A くんが、みんなが滑っているところを周りで見っていました。実は前回も滑りに来なかった A くん。滑ってみたい気持ちはあるのかなと感じた保育士は、A くんを誘ってみました。「・・・」無言ながらも完全に拒否している様子はない A くん。保育士に誘われて意を決して滑って見ましたが、結局は怖くて大泣き。またもや座り込んでしまいました。

一方水遊びの得意な B くんは、そんな様子を見て「A くとすべりたい。すべろう。」と誘います。保育士は「まさか A くんを誘うなんて！きっともう A くんは滑らないだろうし、そっとしといてあげよう」と思い、A くんは誘いを断るだろうと思っていました。

思った通りに A くんは「え？ (ぼくいやだな)」と逃げ腰。でもなんと B くんが手を差し出すと、手をつないで渋々登る A くん



姿がありました。Bくんは、Aくんが怖がっていることを知っているので「ここにおいで」と言って、Aくんを抱きかかえて滑りました。そんな姿に感動した周りのみんなが拍手したのがうれしかったのか、「もういっかい、Aくんとすべりたい。」とBくん。またまた白羽の矢が当たったAくんの顔はまたしても「・・・」。せっかく友だちが誘ってくれているのだからと気持ちを切り替えたのか、今度は自分で登り、表情も随分和らぎ一緒に滑りました。

夕方その姿をAくんの母に伝えました。Aくんの母は友だちに誘われて頑張ったAくんの姿を喜ぶのではないかと考えたからです。しかしAくんの母は保育士が予想していない答えでした。

母は唐突に「Aくん、優しいね」とぎゅっと抱きしめたのです。Aくんの母は、AくんがBくんの気持ちに寄り添って、誘ってくれた想いに応えてあげようとしたのではないかとの見解でした。母の受け止め方が素敵だと思いました。



#### <考察>

ウォータースライダーの斜面滑りでは、普段感じないスピード、高低差、バランス…自分でコントロールすることの難しい動きの経験をした子どもたち。すぐに飛びつく子どもだけではなく、Aくんのように怖いからやりたくないという子どももいる。未経験の怖さは誰しもある。保育士はその気持ちに寄り添いながらも、「でも、少しくらいは体験してみたら…」と考えてしまいがちだ。保育士がAくんを誘ってみたけど、結果は怖くなり泣いてしまった。



一方Bくんはどうだろう。きっとBくんの1番の仲良しであるAくんと楽しさを共有したかったのだと思う。BくんからAくんへの「楽しさのおすそわけ」。そこで「どうしたらAくんは大丈夫なのか」を考え、膝の上に乗せてみようと思った。Bくん自身もそんな経験をしていたのかもしれないが、そこにいた保育士たちは、そんな方法を誰も思いつかなかった。Aくんは、Bくんの身体を通して体験したことで、少し怖さが和らいだのか、最後に滑ったときの表情は全く違っていた。

Aくんの母は「頑張ったね」ではなく「優しいね」と言葉をかけた。その言葉にはAくんの姿を「出来る・出来ない」という捉え方をしていないことを感じた。少し怖いけど大好きなBくんだから断らずに一緒にやったAくんのの気持ちに想いを馳せ、ギュと抱きしめていた。そんな子どもと保護者の関わり方から、保育士が学ぶべきことがたくさんある。

#### (6) 今日こそパンツを持ってきた(大人)

7月中旬のある日。幼児から1週間の予定で舞台を借りて、遊んでいたウォータースライダー。1回目の準備をしている時に、安全確認のため担当が試し滑りをしていた。0歳児のT先生が「むっちゃ楽しそう、私も滑りたい!」と言うので、「どうぞ、どうぞ。」



と伝えると、「今日、着替えのパンツないんですね。」と残念そうにしていた。2歳児が思いっきり滑って楽しんでいた様子を見て、悔しそうなT先生であった。思いのほか盛り上がっていたので、フリーの先生が「明日、1歳でやりましょうよ！」と1歳児の担任を誘っていた。「良いですね、でもどうします？」と小さい子と同じ設備で滑ることに心配した2人は、築山を使ったら出来るかもしれないと、相談していた。その話をT先生はこっそり聞いていた。

翌朝に1歳児のウォータースライダーが始まると、なんと0歳児クラスの合間を見て、本当に滑りに来た！密かに着替えを持ってきたのだ。周りの職員に笑いが起きる。あまり滑らなかったけど、その楽しそうな様子に「私も滑りたかったなあ」という周りの反応。その日のお昼、休憩室ではその場にいた職員で、「どうやったら滑るのか」をテーマにお尻に石鹸、クリアファイル、浮き輪が良いかもなど白熱した議論をしていた。

翌日、前回休みだった2歳の担任の先生が「楽しかったんやろ！だから今日ど〜してもやりたい！」というので急遽セッティングした。2回目になる2歳児さんは、大胆に遊んでいる。せっかくだからと、幼児に連絡して年長児も遊びに来た（年長児は水に濡れる抵抗感があり、ぎこちなく遊んでいたが、やっていくうちに次第に大胆な姿が見られた）。

楽しそうな雰囲気の中、またもやT先生がやってきた！その日は沐浴などあり、なかなかクラスを離れられなかったT先生。副所長に「もう始まっているで」と言われて、何とか協力を得て、駆け付けたらしい。すると2歳児のY先生、「私は今日こそパンツ持ってきました！」と次に滑り出した。すると1歳児の担任も子どもと一緒に滑り出し、なんと別の先生は「私、今日パンツ持ってきてないんですけど。。。でも、ま、いっか。」と滑り出した。T先生と交代した0歳の担任も赤ちゃんを抱いて一緒に滑っていた。保育士が次々に滑るので、子どもたちはその様子を見に集まってきた。あまりのはしゃぎっぷりにポカンとしている子どもたち。その温度差も笑えてきた。そして、その日の洗濯場には大人の着替えが並んで干してあった。



### <考察>

誰一人として強制された訳ではなく、自然に広がっていったエピソードである。しかも3回目は急遽セッティングしたのにも関わらず、次々に滑りにくる保育士の姿に、多くの保育士が着替えを持ってきていることに驚いた。きっかけは1人の保育士がウォータースライダーをやりたいと準備をしていただけである。そこにT先生が0歳児クラスにも関わらずやってみようとしたことで、1

回目の時には「やってみたいけど、恥ずかしい。。。」ときっと様子を見ていた保育士も、楽しい雰囲気徐々に巻き込まれていった。そして遊びながらも、どうやったら滑るのか、保育士が滑りながら試行錯誤している姿があった。仕事帰りにタイムカードを押しに事務所に来た保育士同士で、ウォータースライダーの話が始まり、なかなか帰らなかった程である。この日は、大人の楽しさの化学(科学)反応が起きていた。

大人が何だか楽しんでいる、そんな姿を見て子どもたちも何かを感じていると思う。仲の良い大人同士の関係や雰囲気は、何より楽しい保育が湧きあがる土壌作りのために、重要なのではないだろうか。

### (7) よっしゃ、やってみなはれ！(大人)

このケースは保育事例ではなく、保育士3年目のN先生の体験談です。

私(N保育士)は、保育士になる前、大学でしその研究をしていたので、しそを使って何か保育をしてみたいという思いがありました。その中でしそジュースを作る実践の話を知り、自分もいつかやってみたい！とひそかに胸に秘めていました。しかし、しそを植えてみたのはいいものの、量がとれなかったり、0歳児クラスでしそジュースを作るねらいとは??と踏み込めない自分がいて断念していました。今年保育士3年目、再び0歳児クラスの担任となり、園庭環境をどんどん変えていくパワフルなY先生にしそジュースの話をする、苗は準備するからやってみな！と背中を押してもらい、もう一度やってみようという思いが湧き上がりました。

そこで同じ担任のベテランのT先生に相談しました。T先生の中では、今までの保育経験から0歳児にはこの内容は早すぎると感じながらも、私のやりたい思いを実現させてあげたいという気持ちも交錯し、かなり迷っていました。そこで所長に相談すると、「色の変化とはまだ0歳児には難しい内容もたくさんあり、火も使うので大掛かりにもなるし・・・具体的にはどうするの？」という質問。質問にしっかりと答えられず、どうして良いのか分からなくなりました。

そこでT先生に「もう、やめましょうか…」と言うと、「大丈夫、私もいるから。」と言ってくださいました。そこで再度、所長に相談。「よっしゃ、やってみなはれ！」という返事をいただき、初めて計画するクッキングがスタート。どこで火を使うのか、職員体制はあるのか・・・等々の色々な問題が生じましたが、担任の先生方、調理師やフリーの先生、色々な方に協力してもらいジュース作りが始まりました。

園庭に植えたしそを0歳児の子どもたちと収穫します。まだ歩けない子どもも、しその葉をちょんちょんと触れて揺れるのを見たり、くしゅくしゅと握る中で葉の柔らかさを感じたり、においを一緒に楽しんだりする姿があり、0歳児なりに関わる姿があるのだと気づきました。

摘んだしそを煮だすのは、調理場の一角を借りて、私がしました。実はその日は給食試食会など様々な行事が重なっており、調理師が忙しそうにしている中、鍋の様子を見たりと気にかけてくれました。煮汁に、クエン酸を入れると、パッと鮮やかな色に変化しました。と、同時に甘酸っぱい匂いが調理室に漂います。「うわあ、すごい。」と感じた私の顔を見て、調理師が「なんかN先生、楽しそうやな。」と言ってくれました。

出来上がったしそジュース。ちょっとだけ飲む子、「ん？」という表情で少しずつ飲む子、眉間にしわを寄せながら飲み干す子など、色々な反応がありました。たくさん出来たので、ジュース屋

さんと称して他のクラスにもおすそわけ。どのクラスの子どもも「それなあに？」とキラキラした眼で周りに集まり、「おいしい！」「おかわりちょーだーい！」と大好評でした。

しかしやってみての反省もあります。私が楽しいと思ったクエン酸を入れる瞬間。出来たら保育室でしたかったし、そのためにはもっと調理師を頼っても良かったのではないかと、0歳児なりの反応も見られたが、他年齢の子どもたちも巻き込んで一緒にやっても良かったのではないかと。日程はこれで良かったのか・・・たくさん反省があるけれど、やってみたことで分かったことがたくさんあります。そして、何よりまたやってみてみたいと思いました。

自分のいつかやってみてみたい！でも…と迷って踏み込めなかったことを、やってみたらええやんと助けてくれる職員がいる環境と、実践をしてみたことで思いがけない子どもたちの喜びの反応がうれしく、また新たに楽しい保育を計画し実践してみようと思える出来事でした。

### <考察>

ベテランの T 先生は「え～0歳児でしそジュースを？と最初に思ったが N 先生のやりたい思いを聞きやってみよう」と決めた。計画段階では様々な問題もあったが、結果色々な人の協力を得て実現することが出来て、N 先生にとって良い経験になったのでは。」との感想。

やりたいことがあるけど、自分一人では出来ないかもしれないと躊躇していた N 先生だが、「やりたい」と発信したことで、色々な職員の協力が得られ、実現することが出来た。実現できて嬉しそうな N 先生のジュース屋さんには 0 歳児クラスだけでなく、乳児全クラスを周り、幼児にまで出張していた。事前に日案を考える際には、0 歳児にとってのねらいの部分で悩んでいたが、実際に実践してみたことでよりイメージが鮮明になり、振り返りで気づきと反省点をたくさん話していた。

もし N 先生の「最初的一步」が計画不足という形で実現できていなかったらどうだろう。次にまた挑戦したいと思えるまで、数年かかるかもしれない。0 歳児にとっては活動内容が少し早すぎた部分もあるかもしれないが、N 先生が実際にやってみて学んだことは、長い保育士人生の中でこれから関わる子どもたちに還元されていく。踏み出すことはとても勇気がいるが、これからの保育士の挑戦したい姿を支えていける職員集団でありたい。その後の N 先生はやってみてみたいが止まらなくなり、生き生きと輝いている。「保育を語ろう会」のあと、T 先生は N 先生の成長を我が子のように感じ、泣いていた。

### (8) 泡遊び、楽しそう！私もやってみてみたいけど・・・(3歳児)

幼児期の事例ですが、乳児期に培った力が、少しずつ芽生えてきた事例です。

プールを使って泡遊びをした 8 月上旬のある日のこと。3 歳児クラスの子どもたちが興味津々に“何が始まるのかな”“楽しそう”とやってくる。一番後ろから S ちゃんは“一体、何が始まるのだろう…”と不安げな顔でやってきました。S ちゃんはプール活動が始まって、大きなプールが怖



くて入ったことがなかったからです。

3歳児がプールに入り、魔法の液が入り、身体全体を使って泡づくりをしているのをプールの柵の後ろから見ていたSちゃんの顔は“なんだか楽しそうやなあ”という表情で見えていました。そこでI保育士が「Sちゃんもやってみる？」と声をかけると、「しいひん（やらない）」と半分笑って答えるSちゃん。「たらいで泡遊びをする？」と再度声をかけると、苦笑いしながらプールサイドまでやってきました。しばらくは、一人でたらいで泡遊びを楽しんでいました。



3歳児の子どもたちの泡遊びが終わり、5歳児の子どもたちがやってきて、大胆に大笑いしながら楽しそうに泡遊びを始めました。その姿を見て、Sちゃんは少しずつプールに近づいてきて、プールの階段に足を入れ、ニタツと笑いました。泡の感触を足で調べているようでした。その姿に気づいたI保育士が“今からならSちゃんが遊べるかもしれない”と思い、5歳児のM保育士に「先生、Sちゃん頼んでも良い？」と声をかけ、SちゃんをM保育士に任せて、3歳児の子どもたちとクラスに戻りました。



5歳児の子どもたちがプールの中を走り回ったり、手足を使って混ぜ合わせると、とてもクリーミーな泡になり、泡をいっぱい手につけて「みて、おちひんやろ！」「あわ、おぼけ〜」「ソフトクリームみたい。たべてみて」などとイメージして遊ぶ姿や、泡の中での宝探しゲームの様子を羨ましそうに見ていたSちゃんは、階段から足を下ろし、いつの間にかプールの中に入り、5歳児のMちゃんと二人で楽しそうに泡遊びを始めていました。Sちゃんがプールでの泡遊びをやり始めたのはスタートしてから1時間くらい経ってからでした。



Sちゃんは、にこにこしながら、まずはやさしく触り、そっと掌に乗せて泡のふわふわした感触を確かめました。そして泡の粒を指でつぶしては「あれ？」という表情をしながら何度も試したり、そっと匂いを嗅ぐ姿がありました。そばにいたMちゃんが「ソフトクリーム、たべる？」と声をかけました。SちゃんはMちゃんからソフトクリームをもらって、二人で顔を見合わせました。二人とも満足そうな顔をしていました。

そのうちSちゃんは5歳児の姿を見て、泡だらけのプールの中を歩くと、自分の後ろに泡がなくなることに気づいた。Sちゃんも不思議そうにしながらゆっくりプールを歩き始め、後ろを振り返っては、確認していました。Sちゃんはもう満足したのか「せんせい、もう、おしまいにしてシャワーする！」と泡遊びを終えました。

## <考察>

「プールでの泡遊びをやってみたい」と思った S ちゃんの心の動いた瞬間（お宝＝科学する心の芽生え）を見逃さず、職員同士が連携し、S ちゃんは初めて幼児のプールに入って遊ぶことが出来た。小さい頃から一歩踏み出すのに非常に時間がかかる S ちゃんの姿があり、乳児期から「時間がかかるけど、やってみたい」気持ちを大切にしてきた。結果やれないことも多かったけど、今回遊びを自分で終われるほど達成感を感じ過ごせたことは、乳児期（の土壌）の成果であると考える。

様々なことに興味や好奇心をもってすぐに飛びつける子どもばかりではなく、S ちゃんのように「やってみたいけど、やるまでに時間がかかる」子どもたちもいる。そんな子どもたちの中にも「どうなっているのかな？」「触ってみたいな」など不思議さを感じたり、好奇心が同じようにある。しかし、その科学する芽が、土壌からパッとでてくるのではなく、「やってみたいな」「どうしようかな」と躊躇する思いが交差し、土の中から出てくるまでに時間がかかる時もある。保育士はそんな子どもの姿をゆっくりと見守りながら、職員同士が連携し、子ども自らが主体的に体験できるように、後押ししていきたい。

## ◎保護者への架け橋

新型コロナ流行で始まった今年度。温暖化、度重なる災害…など数えきれない程の不安定な要素があるなか、この先どんな時代が待ち構えているのか誰しもが想像できないくらい、予想がつきにくい時代がやってきている。未来ある子どもたちがこれからの時代を生きていくために、「科学する心」が備わっていることが、非常に重要になってくるのではないかな。

そのスタートは、間違いなく乳児保育が担っている。豊かな土壌を作り、科学する心の芽を育てていく。私たちの保育は、まだまだ満足のいく保育実践ではないかもしれない。日々反省し、学び、繋がり合いのなかで、より良い保育環境と保育実践を目指していく。しかし「科学する心を育てる」というこの大きな営みは、私たちだけでは終わらない。私たちの役割は十分ではなかったかもしれないけど、大切に育ててきた子どもたちの未来を託し、次にバトンを渡していかなければならない時が来る。

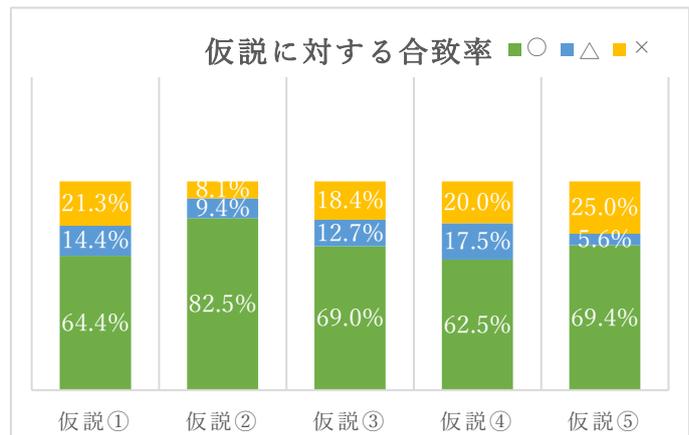
そのために、幼児の保育施設や小学校との連携はもちろんのこと、保護者への架け橋となっていきたい。子どもって「楽しいなあ」、「面白いなあ」、「不思議やなあ」、「深いなあ」、「豊かやなあ」。様々な姿や表情から「科学する心の芽」が育つ様子を、保護者と共に感じていきたい。そして、子どもの成長を喜び合いながら、それがどんな力に繋がっているのかを伝えていきたい。



まずは保護者との信頼関係を築き、送迎時に子どもの姿を伝え、日々のノートで語り合う。時にはドキュメンテーションを利用したり、クラスだよりや保育所だよりを通したりして、保護者への発信を大切にしていきたい。今年度は定期的に玄関に「保育を伝える写真展」を行ってみた。保護者と「科学する心の芽」を感じる機会を作っていくために、今後も様々な工夫をしていきたい。

## ◎全体考察

今回の仮説が、事例に対してどの程度合致しているのか、職員にアンケートを実施した（回答数19）。回答方法は無記名で、“○は合致している、△は少し合致している、×は合致していない”の3項目を8つの事例に対してそれぞれ考え、回答してもらった（複数回答可）。どの仮説も○と△を合わせると、おおむね8割近くあり、今回の仮説は正しかったと考えている。結果を見ると「仮説②共感してくれる仲間がいる」の合致率が突出して高かった。共感する仲間がいることは、良い保育実践をするうえで欠かせない要素であると言えるのではないか。また複数回答がかなり多かったことから、各実践事例に対して複数の仮説が絡み合っ



- ①発見が溢れている豊かな環境。
- ②共感してくれる仲間がいる。
- ③子どもの気づき（科学する心の芽）をキャッチし、共感し、感動する感受性豊かな保育士の存在。
- ④子どもも大人も心から楽しめる保育実践があること。
- ⑤楽しさのおすそわけの大切さ（思わず事務所や休憩室で話したくなる）。

また、主体的に遊ぶ子どもの姿と保育実践を基に「保育を語ろう会」を行い、今回の研究テーマ『科学する心が芽生える土壌づくり』として、仮説と照らし合わせながら、乳児期における保育士の存在と役割について語り合った。

まず1つ目、“発見が溢れている豊かな環境“については、固定遊具の概念に縛られずに、子どもの育ちの課題に向き合い、柔軟で多機能な役割を果たすものを保育士自身が編み出して創っていくことで、より豊かな環境を目指せるのではないだろうか。実践事例では3例紹介したが、他にも動物園のサル山からヒントを得た消防ホースのアスレチック、たいこ橋を利用したハンモック、クイモを利用した砂場の目隠し、トトロのトンネルなどの環境整備を今年度進めてきた。その中で保育士の発想と工夫次第では少ない予算であっても、子どもたちが遊び込める環境作りが出来ることを確信した。手作りであることで、子どもの様子に合わせて柔軟に作り直せることも利点である。保育士同士で雑談しながら作業をするうちに、保育が深められ、環境自体に愛着が湧く。自分自身で作り出した環境で遊ぶ子どもたちの姿は、より深く鮮明に映る。デメリットとしては怪我をするリスクの責任を負うことがあるが、リスクに対してより敏感になることで、逆にリスクを減らせるのではないだろうか。色々作ってきた経験から、科学する心を生み出す要素のある環境に、子どもとの心理的距離感を近づける工夫をすることがポイントとなってくると感じている。今後も新しい発想を持って、創り出していきたい。



2つ目は、“共感してくれる仲間がいる”についてである。どの事例も、まずは「誰か（大人も子どもも）のやってみたい！」の投げかけがある。すると、その“やってみたい”を支える人が必ず現れる。

その後の活動の行く末を決めるのは、2人目の反応が重要である。事例(7)「よっしゃ、やってみなはれ!」を参照して欲しい。ベテランのT先生が、諦めそうなN先生に対して、良い役割をしていた。途中で何か困難なことが起きた場合でも「そんなことは難しいのでは?」「無理なんじゃない」という考えではなく、「どんな方法なら実現できる可能性があるのか(代替案)」も含めて話し込む。最終案まで考え込む前に、とにかく「やってみたい!」と投げかけることで、仲間を見つけて、走り出してしまう。失敗もちろんあるけども、その中で色々な気づきがある。経験が全て学び、細かいことは走りながら考える。すると案外前に進んでいる。このやり方は、楽只らしさの良い雰囲気を作り出している。やってみたい人だけを一人ぼっちにはさせない。そんな気概すら感じる職場環境である。この方法を取るためには、「共感してくれる仲間」の存在が不可欠である。

3つ目は、“子どもの気づき(科学する心の芽と眼)をキャッチし、共感し、感動する感受性豊かな保育士の存在”である。「やってみた」ことに対して、様々な子どもの反応がある。それは予想外であればあるほど面白い。子どもの表情、仕草、言葉にならないつぶやきの瞬間。揺れ動く気持ち。今、まさにそこにある科学する心の芽を見つけた時の嬉しさ。子どもと思わず見つめ合う。保育士は「宝物を見抜く力」を磨いていきたい。

4つ目は、“子どもも大人も心から楽しめる保育実践があること”である。どの事例も本気で楽しんでいるのが伝わるだろうか。(4)の事例「スイカ取ったよ!え?もう!!」は、子どもの様子に一喜一憂。楽しみながら悩みながらも、子どもの育ちに“大切な本質”を見失わないように実践を進めていた。(6)の事例「今日こそパンツを持ってきた!」は、決してふざけている訳ではない。大人も真剣に遊んでいた。一生懸命保育を実践することはもちろん大事ではあるが、大人も一緒に楽しめる“余裕”を忘れずにいたい。

最後に、“楽しさのおすそわけの大切さ(思わず事務所や休憩室で話したくなる)”である。それは決して堅苦しいものではない。保育実践の中で「子どもの心が動いた瞬間」に気づくと、楽しくなってきた誰かに伝えたい。それは担任間だけではなく、事務所や休憩室でも話が盛り上がる。これを「楽しさのおすそわけ」と呼んでいる。そこで保育士の実践や思いがより深く共有されていく。共有されると、やってみた保育士がいない場面の出来事も、情報が集まってくる。そして職員全体で子どもの様子を把握していけるようになっていく。さらに、やってみた人の楽しさが、周りにも広がっていく。すると「大人の心も動く」、だからまたやりたくなるのだ。

この5つの内容が絡み合い、良い循環を生み出している。良い循環を生み出していくことを意識することで、日常の豊かさを作り上げ、良い職員の間人関係と、全体の楽しい雰囲気を構成し、楽しさが湧き上がる「保育の土壌」が豊かな土壌になるのではないかという結論となった。

しかし、これだけの要素だけで「保育の土壌」を語ることは出来ない。その他にも良い循環を支えるための潤滑油や栄養素の役割を果たしているものがあるのではないかという話になった。

第一には、子どもの姿を共有し、子どもの力を把握していることを前提に、子どもの行動に対してある程度リスクを取れていること。そのため、保育士の「禁止」や「制止」の言葉掛けが圧倒的に減っている。余計な手出しや口出しが少なくなることで、子どもが自ら考え思ったことを試したり考えたりしながら行動できているのではないだろうか。

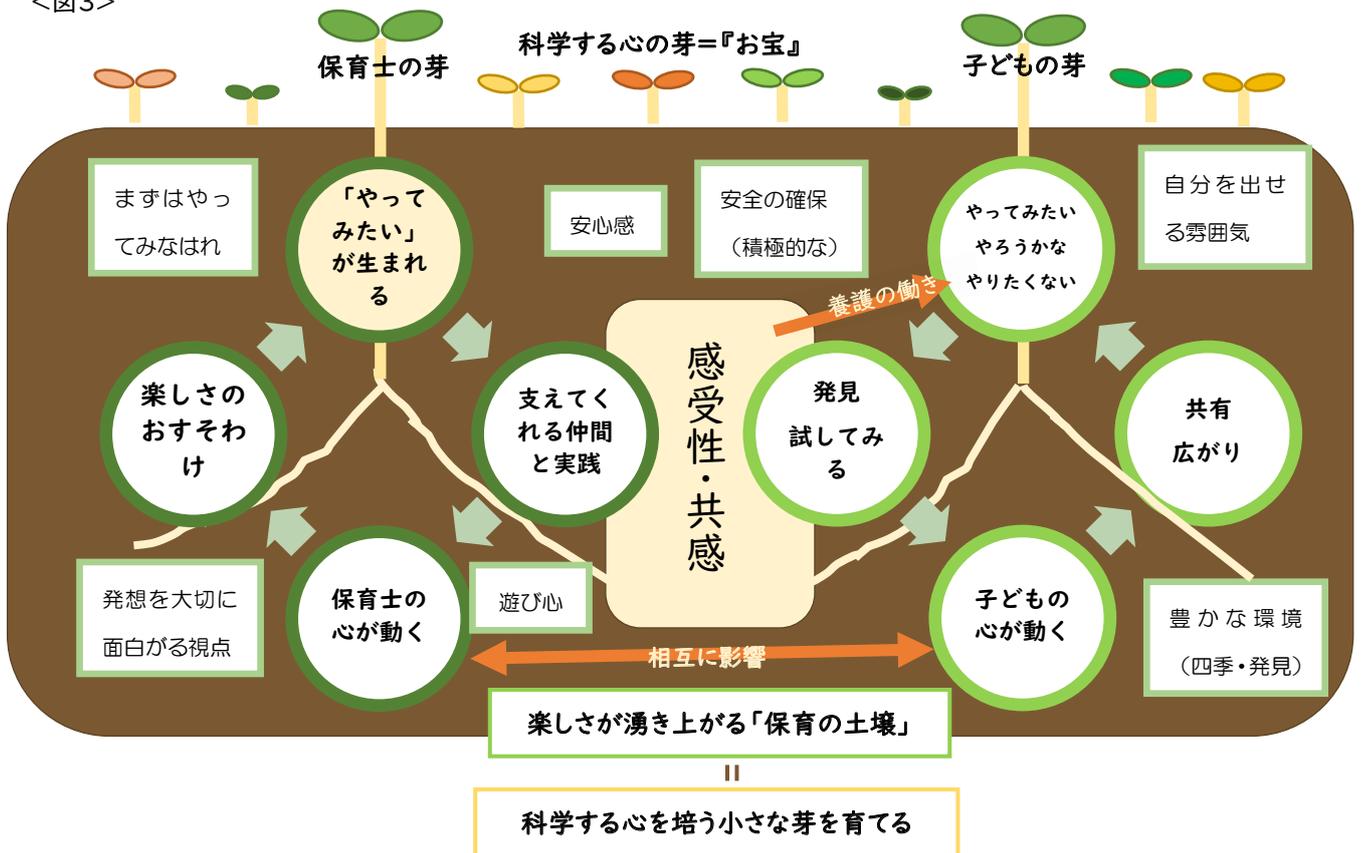
第二には、子どもの予想外の行動に対しても、保育士は待つことが出来る。待つだけではなく、そ

の子なりの発想を大事にしながら、何か面白いことをするんじゃないかな？という視点を持って観察している。すると保育士の感受性も上がり、「子どもの心が動いた瞬間」を捉えやすくなる。

第三には、失敗に寛容な雰囲気である。所長は「まずはやってみなはれ」を口癖にいつも言っている。保育の相談をすると、もっと粋からはみ出た自分の経験談・失敗談を語ってくれる。また副所長も「失敗も全て経験」と多少のトラブルは起こったとしても全く動じない。むしろそんな状況になったことを良い機会だと捉え、共に考えてくれている。全てを包み込んでくれる雰囲気が、良い職員関係を育ててくれている。

最後には「遊び心」。公立保育所ゆえに、障害児や支援を必要としている子どもも多く在籍しており、医療的ケア児も受け入れている。虐待などの深刻なケースも後を絶たない。気が抜けない保育が、日常で溢れている。その状況のなかでも、どの子にも科学する心の芽の芽生えが出来るように、そのための豊かな土壌作りを目指している。どの職員も真剣に保育実践に取り組んでいるのは間違いない。けれど真剣で真面目だけでは、きっと何か足りなくなるのだ。保育には奥深さが必要であり、そのために大人の遊び心が欠かせないのではないかと考えている。

<図3>



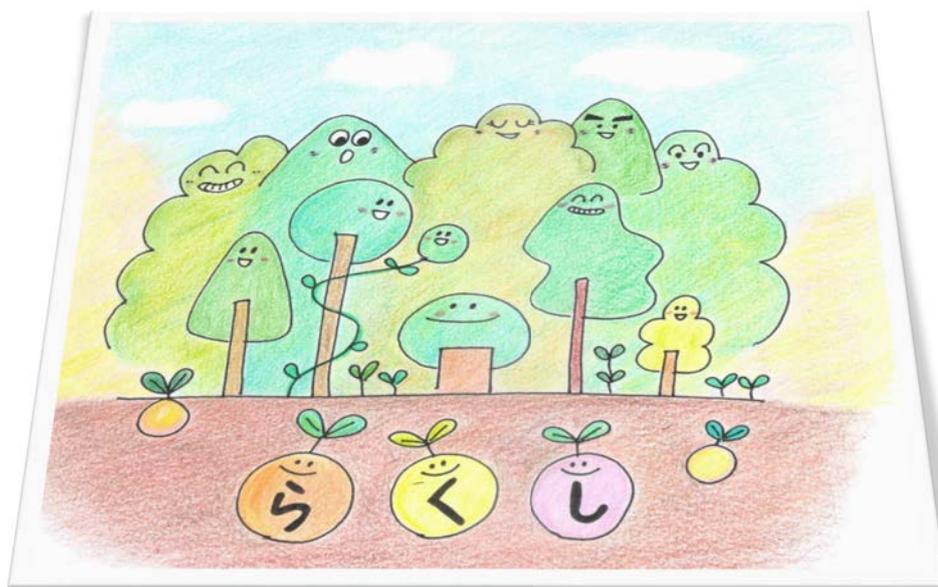
以上が、私たちの考える“楽しさが湧き上がる「保育の土壌」”である。図3に表してみた。しかし実際にはもっと複雑で様々な要因が絡み合って構成されている。図に表してみたけれども、まだ、不十分である。より充実した図を目指していくことが今後の課題である。土壌ゆえに、場所（施設）が違えば構成される要因も変わるだろう。私たちだけで考えても、その時の状況の変化で変わっていくこともあるかと思う。それでも今回の研究で「保育の土壌」にはどんな要因が欠かせないのか、ど

んな働きがあるのかを、「保育を語る会」を通じて多くの職員で語り合ったこと、そのものがまさに重要であるし、この過程こそが“楽しさが湧き上がる「保育の土壌」”を作っていくことに欠かせないのだと思う。

今後の方向性としては、「科学する心の種（出産前，0歳児保育）へのアプローチ」，「科学する心の芽の育ち方（幼児期・学童期への接続）」，「保護者への架け橋の充実」を研究内容としていくことを確認した。また，大正10年に設立された楽只保育所が，残り2年（2022年）で移転となることが決まっている。残り短い期間を大切に，しっかりと保育を繋いでいけるように深め合い，そして新しい場所での保育を切り拓いていきたい。



最後になるが，乳児期に楽しさが湧き上がる「保育の土壌」で育った子どもたちは，科学する心の芽を十分に培い，幼児期，学童期と成長していく。きっと大人になっても終わりはない。今後ずっと続いていくであろう。やがて成長した科学する心の芽は，大きな木に成長していく。太い木，小さい木，形の面白い木，実のなる木，もしかしたら自由奔放に色んな木に絡み合うツル性の木もあるかもしれない。だからこそ乳児期に育った芽は，同じ芽を目指すのではなく，多種多様なものでありたい。芽が育ち，様々な種類の木々（個性）となり，やがて豊かな森（社会）を形成していく。そんなことを思い描いて，私たちはこれからも歩んでいきたい。



◎研究代表・執筆者氏名

京都市楽只保育所 乳児園庭整備・栽培・食育担当	湯谷道雄
乳児チーフ・2歳児担任	植村博美
乳児副所長	長谷川泰代
幼児副所長	大田木祥人
研究代表・所長	塚本真弓
チーム「保育を語る会」メンバー	同